

彩り・潤い・安らぎ、そして健康を、果物・お茶とともに

Fruit &

季刊
冬号
No.45

Tea Times

巻頭言「果樹・茶農業の未来を思う」

特集「果樹における生物防除」

- ・これからの果樹茶での生物的防除研究に期待
- ・フェロモンで天敵を呼び寄せて害虫を減らす
- ・クリタマバチと天敵チュウゴクオナガコバチ
～調査を続けて40余年～

アңыз

カチャカチャTIPS
知ってるようで
知らない果物

果樹・茶農業の未来を思う

総務省の家計調査で2024年の

食品購入量は物価高の影響を受

け、生鮮の野菜や果実の購入量

は2000年以降で最低になったと

ありました（令和7年2月18日、

日本農業新聞、果実にはスイカ

やイチゴも含まれている）。果

実の消費量は61kgで2019年の

71kgから5年連続で減少し続け

ているそうです（5年間で14%

も減少しています）。もう少し

詳しく見ていきましょう、果実

のうち前年比で購入量が大きく

減ったのは、リンゴ（-12.8%）

とミカン（-10.7%）に加え、カ

キ（-14.8%）とモモ（-10.7%）も

大きく減少しました。一方、ブ

ドウ（2.6%）とキウイフルーツ

（11.5%）は増加しました。な

お、緑茶は1%以内の減少にと

どまっています。ところが支出

額で見ましたら、リンゴ・カン

キツともに2.5%、3.8%と上昇

しており、価格上昇が購入量を

下げていると解析されています。

確かにスーパーで果実の価格を

見ましたら、高いなと感じて思

わず手を引っ込めてしまうこと

もあります。

そのような中、2024年の生鮮

果実の輸入は、リンゴが前年比

174%と大きく伸びています

（財務省貿易統計）。リンゴは

ニュージーランドから手頃な価

格帯で入ってきています（写真

1）。また、バナナは輸入量・

果樹茶業研究部門 所長

井原 史雄

価格ともに比較的安定しており、

購入量も安定しています（今更

ですが、家計調査でリンゴとカ

ンキツ購入量を合計した量より

もバナナの購入量が多いのには

考えさせられます）。

もうひとつ、農産物の輸出は

円安の影響もあるようですが好

調で、2024年の輸出額は1.5兆



写真1. 2024年にスーパーで購入した
NZ産のリンゴ「ガラ」、
小玉で4個入り400円程度（税抜き）

円(前年比3.7%増)となっています。中でも緑茶は輸出の伸びを牽引しており**25%増の364億**円を記録し、はじめて300億円を超えました。リンゴも輸出額が**200億円**を超えています。

そうは言いながら、産地の状況はというと、生産者数の減少と高齢化がものすごく進んでいます。農水省の「果樹を巡る情勢」によりますと、**60歳**以上の経営者の割合が**80%**を超えました。果樹・茶産地の10年後はどのようなになっているのでしょうか？

長々しい前置きになりました。この現状と研究とをどう結びつけたら良いのでしょうか？現状を打破するには、消費者が果樹・茶を多く消費してくれるような、価格・品質で生産物を提

供すること、産地を維持するには、省力・自動化の技術開発により、省力かつ高収量が可能な果樹・茶経営と誰でも参入できる農業形態が必要、と考えています。そうしたときの目指す研究方向は、「優良品種を活用したスマート農業の実現」と思います(ほとんどの皆さんがそう思うと思っています)。



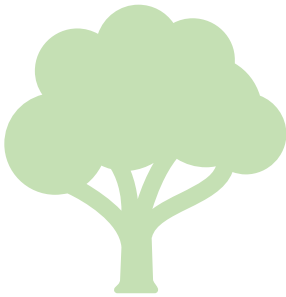
写真2. 開花時期のモモ省力V字樹形

昨年、食料・農業・農村基本法改正法が成立し、農業の生産性の向上のための**スマート農業**技術の活用促進に関する法律も成立しました。農林水産省が示している**スマート農業**というのは、「**ロボット技術や情報通信技術(ICT)**を活用して、**省力化・精密化や高品質生産を実現する等を推進している新たな農業**」とされています。われわれ農研機構果樹茶業研究部門は、第5期中長期計画期間中にも、**カラムナータイプのリンゴ新品種「**紅つるぎ**」(本誌44号参照)**の育成、ナシ、モモ、リンゴ、ミカン、カキ等で**省力・高生産性の樹形(写真2)**と栽培技術、茶の有機農業での**省力化**を実現する茶園用うね間除草機など、**スマート農業の実現に貢献する**

品種・技術を開発しています。令和8年度からの第6期中長期計画については、第5期までの成果を活用しつつ、新たな品種・技術の開発を進めることが求められます。農業従事者の年齢構成を考えましたら、早急な機械化や自動化が必要と感じます。この活用もこれから何ができるか楽しみです。この分野の技術革新は早いですから、今はできなくても5年後、10年後にはできるようになることがいっぱいあると思いますので、乗り遅れてはいけません。

また、農研機構の推進方向として、ハブ機能の強化やグローバル化ということも求められるでしょう。ハブ機能に関しては

今でも公設試との連携の中で培ってきていると考えています。グローバル化に関しては、周辺各国の状況を把握しつつ、世界で通用する技術を開発する必要があります。そしてそれらをビジネスとして世界に展開する……。農研機構は基礎から実用化までの各ステージで、インパクトの大きな成果を創出し、「世界に冠たる一流の研究組織」を目指す、としております。農研機構内外の連携により、皆さんの力を合わせて研究開発を進める必要があります。



参考資料

総務省家計調査

<https://www.stat.go.jp/data/kakei/index3.html>

財務省貿易統計

<https://www.customs.go.jp/toukei/latest/index.htm>

農林水産物・食品の輸出に関する統計情報

https://www.maff.go.jp/j/shokusan/export/e_info/zisseki.html

農林水産省果樹を巡る情勢

<https://www.maff.go.jp/j/seisan/ryutu/fruits/attach/pdf/index-184.pdf>

いはら ふみお

この冬も広島の実家に帰省しました。実家のある集落は古いままです、ずっと変わりません。母は「ついに町内会で最高齢になった」と言っていました。高齢化と人口減少の典型的な場所です。



帰郷



これからの果樹茶での 生物的防除研究に期待

天敵は害虫が増える局面で効果を発揮し始めるため、抑え込むまでは一時的に害虫が生息します。この期間には「果実」への被害発生も時には生じるため、「害虫発生を我慢することなく天敵を働かせるにはどうすれば良いか？」は生物的防除普及のために重要な課題であり、難題です。解決策としてまずは**農薬との共存**です。天敵に対する農薬影響評価を行って悪影響の少ない農薬との併用を図り、害虫への制御力を高めます。次に害虫密度が低いうちに天敵を定着させるため、草生栽培あるいは防風樹の活用で果樹園周囲の環境に**天敵の生息環境を確保する**研究が進みました。周囲から天

敵を誘引したり、**天敵の寄生率を高めたりするような物質の利用**は、環境負荷も少ない第3の手段といえます。かつては夢のように思われた手段が、地道な研究により実用化への期待に変わってきました。現場にフィードバックされ、低コスト栽培の実現に繋がることが期待されます。

自身の研究経験からの気づきを挙げると、カキではヘタが果実に密着する**富有**のような品種は、ヘタと果実の隙間に**コナカイガラムシ**類が潜り込んで増えるために着色異常や汚損等の被害が大きくなりますが、**平核無**のようにヘタが立つような品種では被害が少なくなります。

果樹茶業研究部門
研究推進部

望月 雅俊

天敵の働きに加えて、このような特徴を活かした品種であればカキの**コナカイガラムシ**被害も軽減されると確信しました。また**茶**では重要害虫**カンザワハダニ**が吸汁によって新葉に褐変被害を起こしますが、カブリダニ類などの**捕食性天敵**がこのハダニ密度を抑えます。ハダニは成葉で増えてから次第に新葉で増えるため、成葉でのハダニ密度が低い品種・栽培方法があれば、天敵の働きも合わせて新芽の被害が少ないうちにハダニ密度を制御できると予測しました。いずれも研究の実現は叶いませんでしたが、果樹茶害虫の生物防除では品種・栽培技術開発陣

と一体となった研究対応が不可欠と信じています。

ところで果樹害虫の生物防除はどれほどの経済的効果を生んでいるのでしょうか？カンキツでの成功例を分析した元静岡県柑橘試験場 古橋嘉一博士の試算によると、**ヤノネカイガラムシ**に対して1980年代に導入された2種類の天敵寄生蜂では、導入によってヤノネ密度が著しく減少して農薬散布の必要性が低下したことによる経済効果は年間**43**億円。**イセリヤカイガラムシ**(写真1)に対して1900年代初頭に導入された**ベダリアテントウ**(写真1)では、同様に農薬散布の必要性が低下した結果、これまでの1世紀に及ぶ累積的な経済的効果は現在の貨幣価値に直すと**6000**億円ともいわれています(植物防疫67巻(6



写真1. イセリヤカイガラムシを捕食する
導入天敵ベダリアテントウ幼虫

号)2013年)。クリでは**チュウゴクオナガコバチ**の導入成功(本号記事参照)によってクリタマバチ耐虫性の必要性が低下し、さまざまな優れた品種が開発・普及されたことは巨額の経済価値を生んでいるに違いありません。圃場で天敵昆虫を見るにつけ、偉大さに感動する日々であります。

もちづき まさとし

1967～2022年 野菜・茶業試験場、農業環境技術研究所、農研機構果樹茶業研究部門等にて果樹茶の害虫防除研究に従事。自然に囲まれた職場環境で楽しく仕事をしました。2022年4月から果樹茶業研究部門 研究推進部 再雇用職員(興津カンキツ研究拠点に勤務)



フェロモンで土着天敵を 呼び寄せて害虫を減らす

植物防疫研究部門
果樹茶病害虫防除研究領域

菅原 有真

持 続可能性、SDGsというキー

ワードが人口に膾炙して久しくなりました。果樹栽培においても化学農薬や化学肥料をなるべく使わない、環境に配慮した保全型の生産体系への移行が世界的な流れとなっています。環境保全型の農業において害虫防除のために様々な技術が開発されており、その中でも生物的防除はもともと重要な防除手段です。**生物的防除**には人為的に増殖させた**天敵昆虫を外部から導入する手法**と、元々農地やその周囲の環境に生息している**土着天敵**の働きを強化する手法（**保全的生物的防除**）があります。特に土着天敵を害虫防除に利用する保全的生物的防除は、人為的に

天敵を導入する方法に比べて環境に悪影響を与えるリスクが少ないため、環境保全型の農業体系のコンセプトに沿う害虫防除法として注目されています。しかし、この方法を実際の農業現場で活用するには、いくつかの課題を克服する必要があります。

土着天敵はいつも遅れてやってくる

土着天敵は、害虫が大量に発生し、餌場として魅力的な状態になったときに農地に集まります。そのため、天敵が到着する頃には、害虫による被害がすでに無視できないレベルに達している場合が多いのです。このように、害虫と天敵の活動するタイミングや場所が一致しないこ

とは、土着天敵の活用における大きな課題の一つです。

天敵を引き寄せる匂いの活用

この課題を解決する方法の一つとして、天敵を誘引する匂い物質（**天敵誘引物質**）を利用する技術が注目されています。果樹害虫**フジコナカイガラムシ**

（以下、**フジコナ**）はカキのヘタ下、ブドウの果軸、袋掛けしたナシの表面など果実の閉鎖的な部位に固着し、師管液を吸汁して糖分を過剰に含む甘露と呼ばれる排泄物を撒き散らして、果実表面に汚損被害をもたらす害虫です（**写真1**）。**フジコナ**を始めとするカイガラムシ類は雌

フジコナカイガラムシによる果実被害



甘露で汚れたカキ果実



ヘタ下に隠れて吸汁するフジコナ

写真1. フジコナによるカキの果実被害。ヘタの下に集まって師管液を吸汁し、糖分を多く含む排泄物で果実表面に黒カビを生やす。

雄で全く姿が異なり、雌は脱皮を繰り返して幼虫の姿のまま成虫になり植物体に固着し続ける。一方で、雄は蛹期間を経て翅を持った成虫に変態します(図1)。動けない雌が雄を誘引する匂い物質(フェロモン)を分泌し、フェロモンを感じた雄が空を飛んで雌を探し出すことで交尾に至ります(図2)。フジコナは天敵寄生蜂であるフジコナカイガラトビコバチ(写真2)は、フジコナの雌が放出するフェロモンを触角で感知することができ、フェロモンを手掛かりにフジコナの雌成虫の居場所にたどり着き、寄生します(図2)。この生態を応用し、人工的に合成したフジコナのフェロモンを農地に設置することで、トビコバチなどの天敵を効率的に誘引できる可能性があります。

カイガラムシの生活環 Ex.) フジコナカイガラムシ

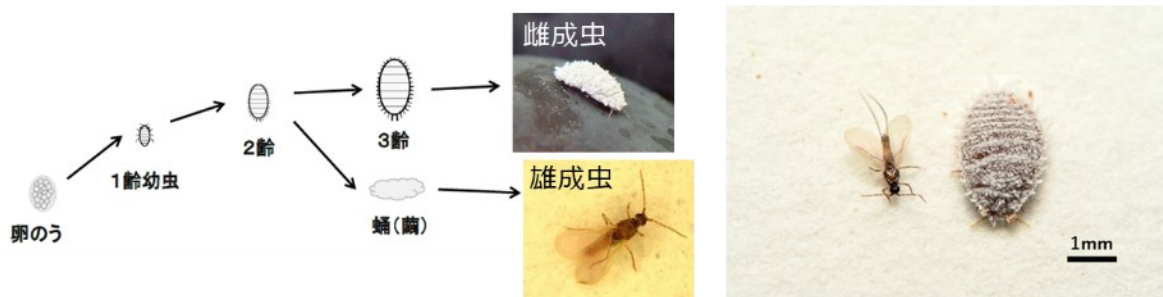


図1. 雌は脱皮を繰り返し幼虫と変わらぬ姿で成虫になるが、雄は蛹を経て翅が発達し積極的に飛んで移動できる。

フェロモンを介したカイガラムシの交尾行動と寄生蜂の関係

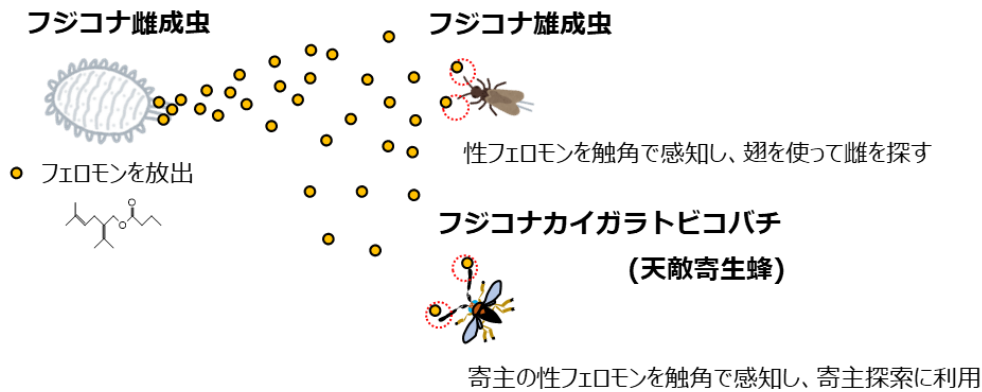


図2. カイガラムシでは植物体上に固着して動かない雌成虫がフェロモンを出し、移動分散できる雄成虫を的確にナビゲートすることで配偶行動が成立している。トビコバチは寄主となるカイガラムシのフェロモンを感知し、寄主となるカイガラムシ雌成虫の探索に利用する。

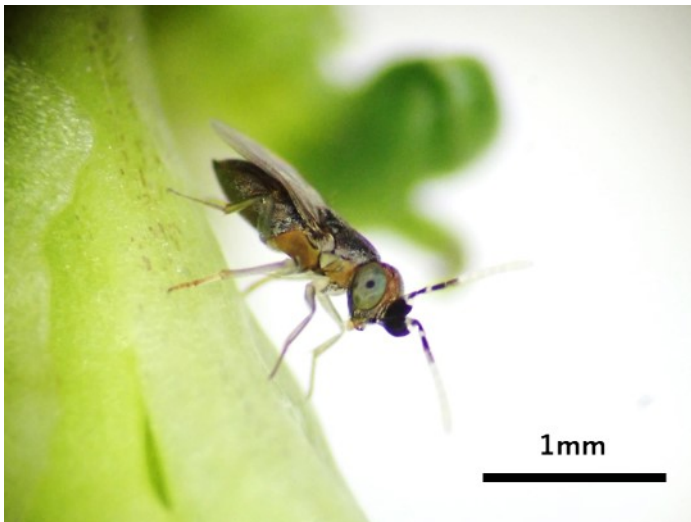


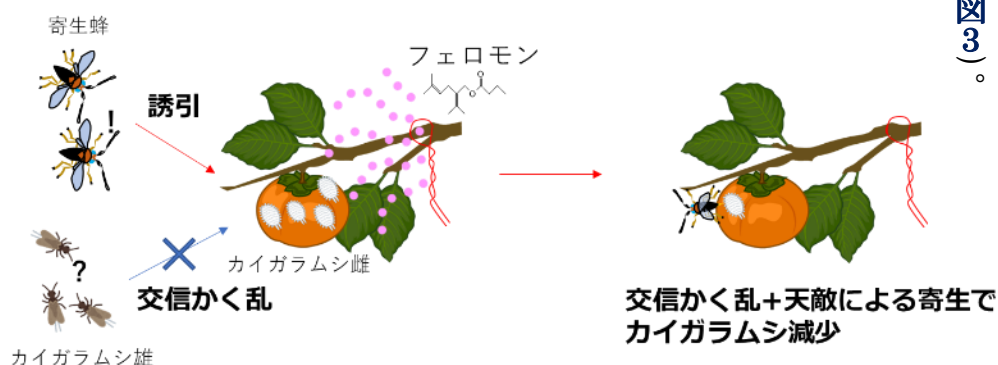
写真2. フジコナカイガラムシの天敵寄生蜂
フジコナカイガラトビコバチ

フェロモンのような天敵誘引物質は、土着天敵の果樹園への到着を早め、害虫防除の効果を高めるツールとして期待されています。

高濃度フェロモンで寄生率が上がる
フェロモンを使った害虫防除法としてすでに普及している

「**交信かく乱法**」という防除技術があります。**フェロモン**を果樹園に充満させることで、特定の害虫の雌雄の交尾行動を阻害し次世代密度を下げる手法で、狙った害虫のみを選択的に防除できるため環境負荷が小さい害虫防除法として普及しています。実はフジコナでは交信かく乱のために**フェロモン**を人為的に圃場に設置する事で、土着天敵**フジコナカイガラトビコバチ**の寄生率が上昇する事が分かっています。交信かく乱によりフジコナの密度は下がっているにも関わらず寄生率が上がるのは、**性フェロモン**が高濃度で存在する果樹園はカイガラムシが大量に発生している魅力的な餌場であると寄生蜂に誤認されるためではないかと考えられます。**交信**

交信かく乱剤でカイガラムシが減る2つのメカニズム



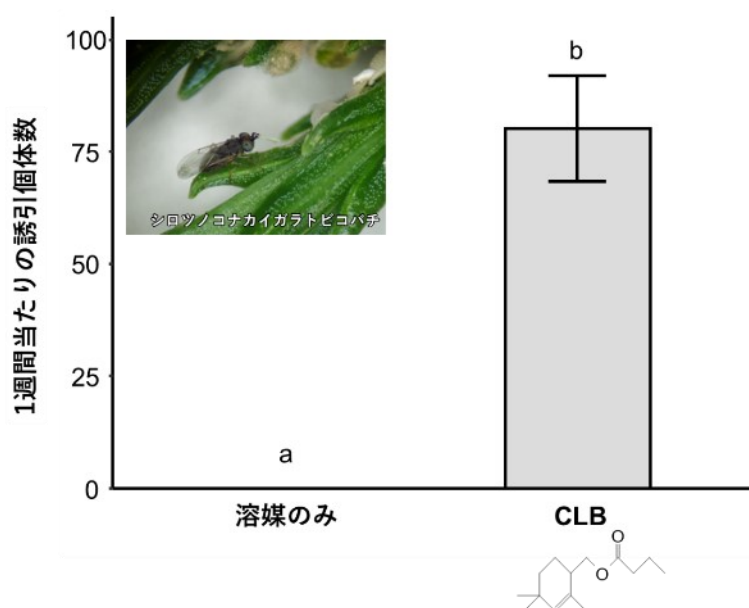
カイガラムシ雌

図3. 交信かく乱法は害虫と天敵の両方に作用してカイガラムシを減らす

かく乱法によりカイガラムシが短期間で劇的に減るのは、カイガラムシの交尾を阻害するとともに、土着の天敵寄生蜂を果樹園に誘引することで防除効果を高めているためと考えられます(図3)。

超強力な天敵誘引物質「CLB」

交信かく乱との合わせ技ではなく、純粋に天敵誘引の効果だけで**フェロモン**が害虫数を減少させた事例もあります。例えばフジコナの**性フェロモン**の一部の構造が変化した化合物**シクロラバンデユリルブチレート**(英語表記の頭文字をとって“**CLB**”)には、トビコバチ科寄生蜂が3種も誘引されることが判明しています。3種のうち特に**シロツノコナカイガラトビコバチ**は**CLB**に非常に強く誘引されることとが分かっており、その誘引数はこれまで発見された天敵誘引物質の中でも群を抜いています(図4)。**CLB**はフジコナの**性フェロモン**に構造的に似ていますが、フジコナの雄に対する誘引活性はなく天敵誘引効果しかありません。この**CLB**をカキ園



に設置した試験の結果、**フジコナカイガラムシ**の個体数が減少したことが確認されました。**CLB**は**フジコナフェロモン**の合成の過程で発生する副産物であり、今のところ天然物としては発見されていません。**CLB**がトビコバチを強力に誘引する仕組み

図4. 一週間当たりのCLBルアーに対する天敵寄生蜂の誘引個体数
(農研機構安芸津研究 拠点で2023年5月から9月にかけて実施した調査結果)

みは未解明ですが、今後の研究で明らかにしていきたいと考えています。

天敵誘引剤の課題と展望

土着天敵を誘引する天敵誘引物質を使用することで人為的に果樹園に天敵をリクルートすることはできそうです。ただしその防除効果は一時的で、誘引された寄生蜂のほとんどは果樹園に定着しません。誘引物質で呼び寄せた天敵による防除効果を持続的に得るためには、果樹園内部に天敵を定着させる必要があります、そのためには天敵誘引物質だけでなく、これまで個別に研究されていた天敵利用技術を統合したアプローチが必要でしょう。今後もカイガラムシ防除における天敵誘引物質利用

が、保全的生物的防除の優良事例になるように研究を進めていきたいと思っています。

すがわら ゆうま



九州大学大学院博士課程修了(2020年、農学博士)。その後、信越化学工業株式会社入社。同社合成技術研究所ファインケミカル部門にて害虫の交信攪乱剤の開発に従事。2023年4月より農研機構入構。安芸津研究拠点にて勤務。天敵誘引物質を活用した土着天敵利用に関して、カイガラムシの性フェロモンやCJTBに誘引される土着の天敵寄生蜂の分類や寄主選択性に関して研究。また性フェロモンが未知のカイガラムシのフェロモン構造を解明し、野外での天敵誘引活性を検証することで新たな天敵誘引物質の探索も行っている。

特集記事

クリの害虫クリタマバチと天敵 チュウゴクオナガコバチ ～調査を続けて40余年～

クリタマバチ（写真1）は、

今から80年以上前に日本への侵入が見つかったクリの害虫で、かつては防除がとても難しい害虫と言われていました。しかし、40年ちよつと前に中国大陸から導入した天敵**チュウゴクオナガ**



写真1. クリタマバチの雌成虫（体長は約2mm）

コバチ（写真2）を放飼し定着

したことで防除に成功、今では問題視されることはほぼありません。ここでは、この天敵の最初の放飼地点で今まで続けた「**害虫と天敵の動態調査の結果**」について、ご紹介した

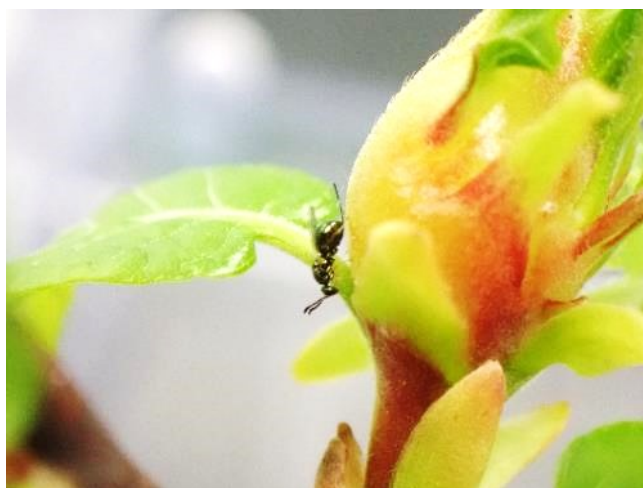


写真2. チュウゴクオナガコバチの雌成虫（体長は約2～3mm）

植物防疫研究部門
果樹茶病害虫防除研究領域

屋良 佳緒利

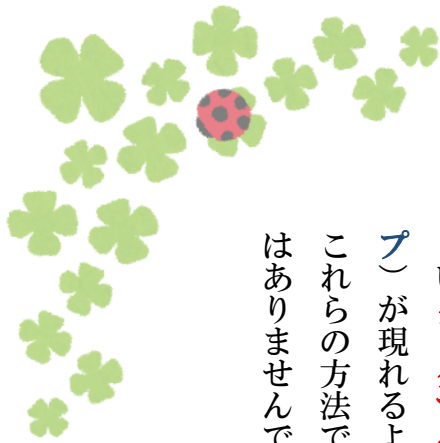
と思います。

侵入害虫クリタマバチ

クリタマバチ成虫は初夏にクリの新芽に産卵します。翌春には産卵を受けた芽の中で幼虫が成育すると共に虫こぶ（写真3）が形成されて、芽の伸張が止まってしまいます。そのため



写真3. クリタマバチの虫こぶ（白矢印）



多数の虫こぶが出来てしまうと、樹の生育状態が悪くなり、クリの収穫量が減ったり、樹が枯れてしまうこともあります。1941年に日本で初めて見つかったから20年位で全国のクリの生産地に広がり、大きな被害をもたらしました。

クリタマバチは1年1世代で、その一生の大半を虫こぶの中で過ごすため(図1)、農薬を散布してもあまり効果がありません。また、**クリタマバチ**に耐性を持つクリ品種を育成しても、やがてその耐虫性を打ち破る新しい**クリタマバチ**(**バイオタイプ**)が現れるようになりました。これらの方法での防除は容易ではありませんでした。

導入天敵チュウゴクオナガコバチ

チュウゴクオナガコバチは**クリタマバチ**に寄生する蜂(寄生蜂)です。**チュウゴクオナガコバチ**も1年1世代で、成虫が春に現れた**クリタマバチ**の虫こぶを見つけてその中に産卵し、孵化した幼虫は虫こぶ内で守られている筈の**クリタマバチ**幼虫に張り付いて食べていき、最終的には食い殺します(外部寄生、図1)。

本種は**クリタマバチ**の原産地が中国大陸と判明したことから行われた原産地での調査により最も有望な天敵として見いだされた**寄生蜂**です。日本への導入は、1982年に茨城県つくば市(現在の農研機構果樹茶業研究部門敷地内)で、本格的な天敵放飼が始まりました。

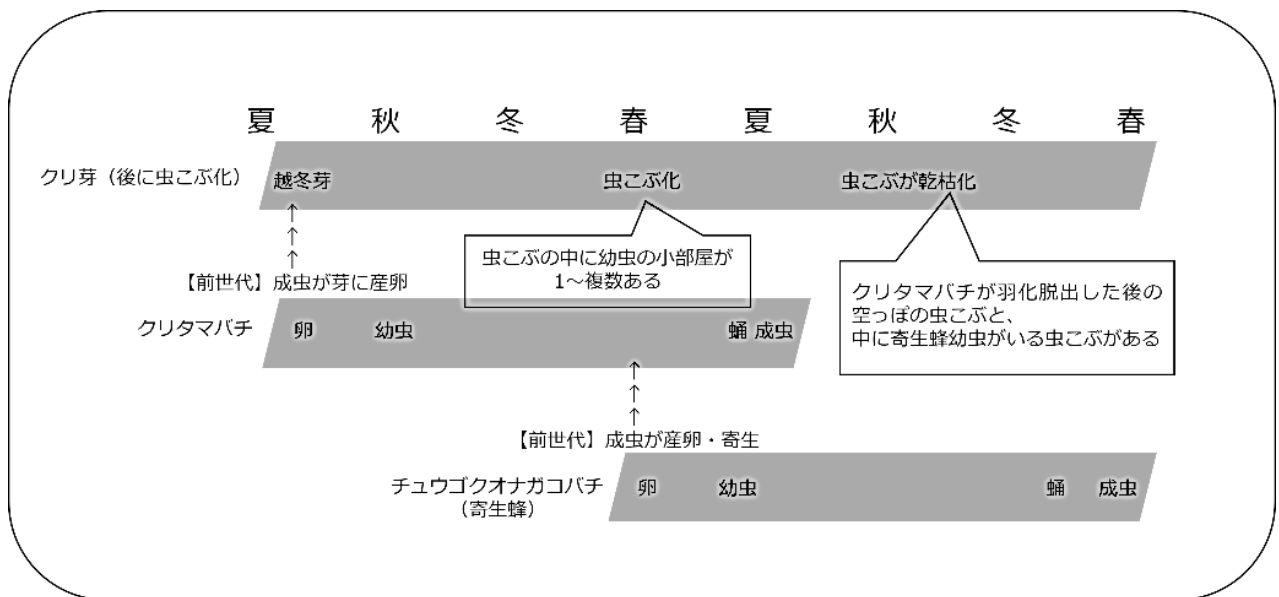


図1. クリタマバチとチュウゴクオナガコバチの生活史 (Moriya et al 2023より大幅改変)

防除効果の長期調査

ここで問題となったのは、天敵を放飼した後の防除効果がどの程度長く維持されるのか、という点でした。そこで、放飼後から最初の放飼地点での両者の発生調査が毎年行われるようになりました。放飼後10年間の結果から、1回の放飼で天敵が定着し、害虫密度が十分に減少したことが分かり、防除は成功したと判断されました(図2の1990年代頃まで)。この結果を受けて日本各地で放飼が進められ、同様に防除に成功しています。

さて、最初に放飼した地点でのその後の害虫と天敵の様子はどのようなのでしょうか？

10年後以降も調査は毎年続けられ、ごくまれに害虫密度が高く

なることがあっても(図2の

2000年、2008年、2014年)、これを追いかけるように天敵もすぐに増え、すると間もなく害虫が減っていく、というパターンが明らかになりました。いったん防除成功と判断した後も調査を続けてきたからこそ、40年間もの長期にわたり天敵がその場所に定着し続け、防除が難しかった侵入害虫を抑えているという証拠が得られました。

このように侵入害虫に対し、その原産地に生息する有望な天敵を導入放飼する防除法は、日本の果樹では他の侵入害虫に対してもかつて行われていました。クリタマバチのような長期的な調査研究はありませんが、状況証拠から防除は成功と言われています(表1)。昨今では外来

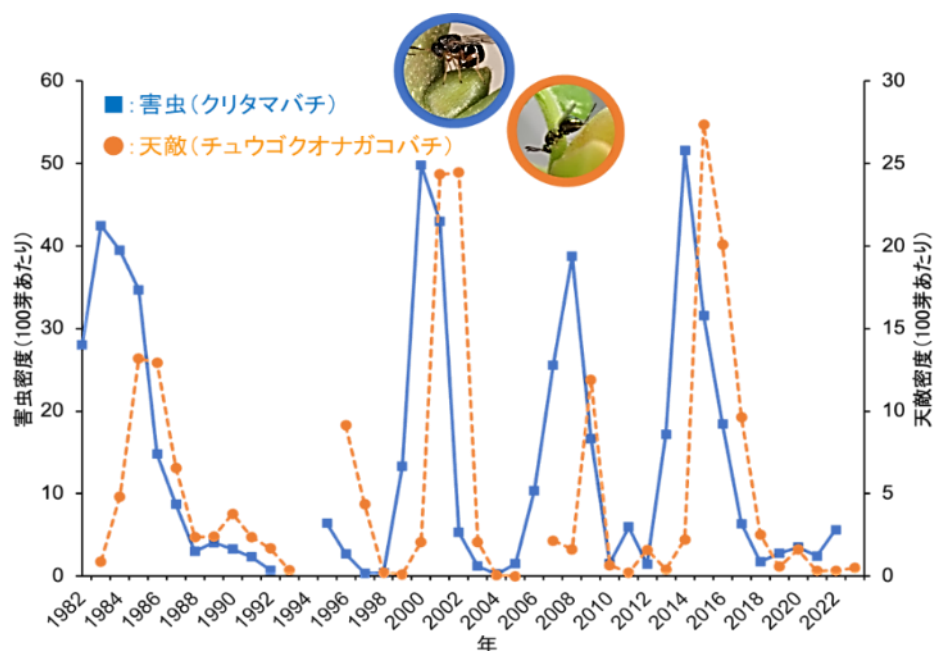
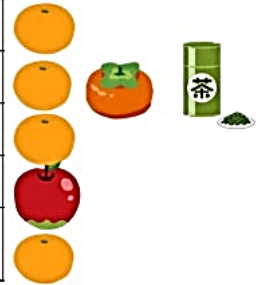


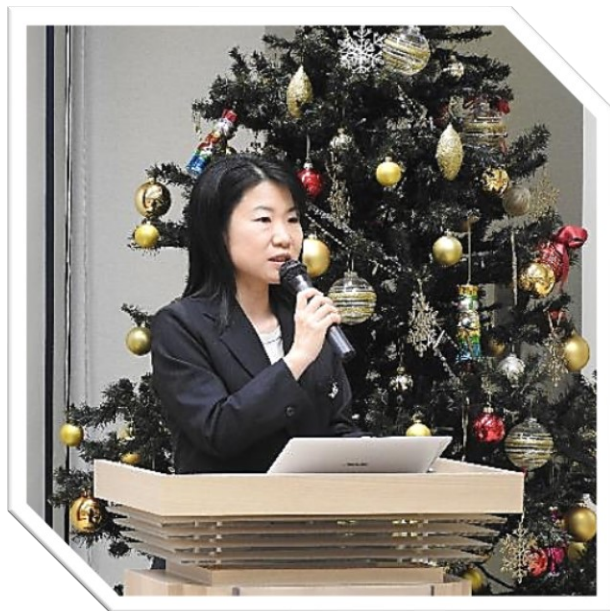
図2. クリタマバチとチュウゴクオナガコバチの長期動態

表1 他にもある！天敵導入による果樹（柑橘、リンゴ、柿）、茶での防除成功例

侵入害虫	発見年次	天敵	導入源（原産地）	導入年
イセリアカイガラムシ	1908	ベダリアアテントウ	台湾（豪州）	1911
ルビーロウムシ	1884	ルビーアカヤドリコバチ	九州（中国）	1948
ミカントゲコナジラミ	明治中期	シルベストリコバチ	中国	1925
リンゴワタムシ	1872	ワタムシヤドリコバチ	米国	1931
ヤノネカイガラムシ	1898	ヤノネキイロコバチ ヤノネツヤコバチ	中国	1980



村上(1997)、古橋(2013)、高須(2022)を参考に作成



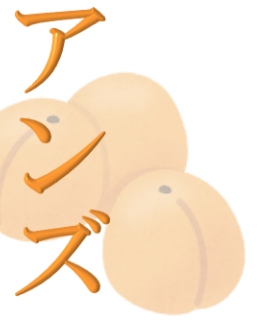
やら かおり

生物を導入する際に環境へ悪影響を及ぼしうることに対する評価が難しく、最近の天敵導入事例がありませんが、世界では今でも必要に迫られれば（環境への悪影響についての厳しい事前評価をクリアした上で）行われている生物防除法のひとつです。



実は2年ちょっと前にも本誌（34号）でクリタマバチの生物防除について書かせていただきました。が、研究そのものというより付随するエピソードのご紹介でした（でも内容は面白いとは思いますが、未読の方は是非！）。これは当時、論文公表が間に合わなかったため、今号で改めて研究成果としてご紹介する機会をいただき、編集部、関係者の皆さまに感謝しています。

石橋を叩き過ぎて壊して渡れなくなる性分だったのが、オフでは前よりチャレンジするようになり、さんさ踊りやパイプオルガン演奏体験など、盛岡での生活を楽しんでいます。



研究推進部研究推進室

和田 雅人

アンズは、中国大陸に起源があり、日本でも古来から栽培され、生薬や食用にされてきた果物です。アンズから連想されるものとして、中華料理の定番デザート「杏仁豆腐」、カクレのベースのリキュールとしての「アマレット」、ドライフルーツとしてアウトドアの行動食で重宝する「アプリコット」などがあげられます。しかし、アンズの果実の旬がいつか？日本ではどこで生産されているのかなど知られていないことも多いように思います。アンズの

収穫期は産地や品種にもよりますが、日本国内では6月～7月ごろ。産地はほぼ青森県と長野県です。世界ではトルコ、ウズベキスタン、イラン、イタリアなどで栽培されています。収穫後の果実は日持ち性が劣り、急速に軟熟化するため、生食の間は短くなります。果肉の独特の黄金色や香りから加工品に根強い需要があり、シロップ漬け、ジャム、干しアンズ、アンズグーラツセ、ジュースなどに製品化されて流通しています。

さて、中国大陸からアンズが欧州に渡ったのもかなり古い時代と考えられています。紀元前1～2世紀にはペルシアに入り、アルメニアを経由してギリシアに伝わったと考えられています。

ペルシアやアルメニア、アナトリア地方で長い期間栽培されてから欧州へ伝わりました。そのためアンズの起源がアルメニア地方と考えられ、学名が *Prunus armeniaca* L. となっています。

その後、イギリスに伝播したのが、16世紀初頭でした。イギリス人は、それまでアンズという果実を知らなかったため、始めの頃 *praecox* (早熟性果実) と称していました。それが時代を経るにつれて *praecox* が

apraecox、そして *apricox*、

apricot と変化し、現在のアンズ

の英語名「アプリコット」となったそうです。アンズは核果類に属しており、近縁の仲間としてウメやスモモがあります。

それぞれの英語名は、 **Japanese**

apricot の **Japanese plum** の表記

されることがあります。日本人としてはちよつと違和感を持つ呼び方にも感じますが、われわれも「カボチャ」「サツマイモ」など原産地と関係なく経由地やその時の産地名をつけたりしますので同じ事なのかもしれません。

アンズはウメやスモモとごく近縁な仲間であると言いましたが、実は種間交雑がおきやすく、種間雑種も多いのです。日本の研究者が日本産のウメのゲノム情報をアンズとスモモのゲノムと比較したところ、アンズやスモモと何度か交雑していることが分かってきました。人が栽培して、有用な品種を選抜してきたと考えると、日本のウメにはアンズやスモモの有用な形質が

受け継がれているのかもしれないと考えられています。手前味噌ですが、農研機構果樹茶研ではウメとニホンスモモの交配種「**露茜**」（つゆあかね）（写真1）を育成しております。またアジア系のアンズは酸味が強くヨーロッパ系のアプリコットは酸味が少なく生食に向いていることから、新たに日本在来品種より糖度が高く、酸味が少ないアンズの新品種「**おひさまコット**」（写真2）、「**ニコニコット**」（写真3）を育成しました。お見知りおき下さい。



写真1. 「露茜」果実



写真3. 「ニコニコット」果実



写真2. 「おひさまコット」果実



ちよつと昔のお話です。まだメールが普及していない頃、とても忙しい教授がおりました。

研究室にいる時間も取れず、大学内や外を飛び回っていました。自分の研究室の学生達にいろいろ指示をしたいのですが、会うこともままならない。そこで、教授は研究室の学生のデスクに早朝や深夜にメモを残しておくことにしました。急いでいることもあり、また達筆(?)な事も禍して、そのメモを読むことはひどく難解でした。無造作にデスクに置かれているので、縦書きなのか、横書きなのかも分からない(斜め書きのもあり)。メモがあることに気づいた学生はそのメモの判読に余計な時間を取られることになったのです。

ところが、学生の中にそのメ

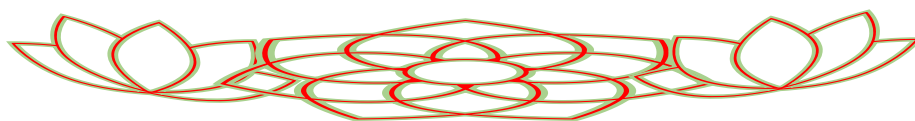


モを判読できる者が数人現れました(進化的適応?)。「○×△教授文字解読班」と名乗り、毎日のようにデスクに置かれているメモの解読に夢中になっていました。研究すべきことが全くズレているのですが、メモを残された学生にとっては渡りに船でした。例えば「解読班」がメモを「×△に関する投稿論文の準備をするように」とか「昨日の○×実験の結果はどうなったか」と翻訳すると、学生はそれにあつた対応として「論文の準備」または「実験のまとめ」をしました。そして次に教授に会った時にメモに従いそれらを遂行したと示したのですが、悲しいことに(人生ではままある?)多忙な教授は、自分が書いたメモのことをすっかり忘れていたことがよくありました。

そして「なぜそんなことをしたのか?」と逆に尋ねてくる始末です。こんな答えが返ってくるとは想像もしなかった学生は慌てふためいて「でも先生のメモが・・」と言いつつ、震える手に持っていたメモを教授に渡しました。メモを手にとって、怪訝そうに眺める教授は言い放ちました「なんて書いてあるの?」と、まるで落語のような落ちです。

今では、発達した通信手段で相互にやりとりが出来る時代になり、「解読班」はお役御免でしょう、上に述べたような悲喜劇は起こりそうもないですが、「つぶやき」が誤情報を多く生んでいるのも事実です。やはりどんな時代でも必要なのはお互いを思いやるコミュニケーションなのでしょ。 アダムU2

Fruit & Tea Times



2016年 11月 1日 創刊
2025年 1月 1日 45号刊行

刊行/国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構
果樹茶業研究部門

企画・編集/研究推進部研究推進室 TEL 029-838-6447

住所/ 〒305-8605 茨城県つくば市藤本2-1

URL: <https://www.naro.go.jp/laboratory/nifts/index.html>

彩り・潤い・安らぎ、そして健康を、果物・お茶とともに

